

地震後助けてもらったこと

五十嵐 祐亮

十月二十三日午後五時五十六分、地震は
きた。地面がゆれていた。グラウンドへ避難
すると、周りの人がみんなきて、大丈夫なの
かという顔で心配そうだった。夜は寒かった。
その日はそこで一晩すごした。朝はそこにい
た人たちがご飯を作ってくれていた。うれし
かったしおもしろかった。そんな日が続いた。

山古志小学校

そして3日目、ヘリで避難所まで自衛隊の
人がつれていってくれた。いつもどれるか心
配な気持ちでヘリに乗っていた。長岡の大手
高校へ行き、場所を移動して明德高校へ避難
した。そこには食べ物や毛布などほかにもい
ろんな物資があった。うれしかった。ボラン
ティアの人もたくさんいて、みんなの手伝い
をしてくれていた。そういう所で生活してい
た。でも決して安全ではなく、時には余震
もおきたこともある。そんなこともあったけ

どよか。たことはボランテイアの人が遊んでくれることだ。た。

体育館で遊んでくれたりいろいろなイベントなどをしてくれた。ヒマだ。たときはうれしか。たし、楽しか。た。ほかにも自衛隊の人には、毎日朝、昼、夕食を作ってもらって、たこともうれしか。た。今日はどんなご飯なんだろうと思いながら毎日が楽しみだ。た。ご飯のふたを開けるとおいしそうなにおいがする。それにおいしか。た。しかもお風呂も

山古志小学校

つく。てくれたりもしてくれた。本当に助か。た。自衛隊の人には、感謝したい。あとへり、再び山古志を空からみせてもらった。山はす。かり変わ。ていた。山がくずれていた。り地面にはひびが入。ていた。みんなおどろいた顔だ。た。ぼくも同じ気持ちだ。た。だけどこれからはみんなに助けてもら。た。分、毎日を大切に生きていきたいと思う。そんな気持ちだ。